

蚕婦詩の系譜

丹羽博之

要旨

絹を作る女性達の辛苦を詠んだ一連の漢詩がある。その詩は、唐の杜甫にその萌芽が見られ、白樂天の作品にも受け継がれ、宋の張翥「蚕婦」、謝枋得「蚕婦吟」等に詠まれ、『古文真宝（前集）』（卷一）にも無名氏「蚕婦」が収められている。

中国の漢詩、特に社会批判の詩から強く影響を受けた韓国の漢詩にも蚕婦を詠んだ作品が残る。高麗末期の李穡の「蚕婦詩」や、李氏朝鮮時代の李孟専にも「蚕婦詩」詩があるとされてきた。

一方、日本では、かなり時代が遅れ、ようやく江戸末明治初期の詩僧、釈大俊に「蚕婦詩」の作が詠まれた。その後、明治維新を経て、殖産興業の一環として、製糸業が興り、養蚕業に従事する女性達も漢詩に詠まれた。

本稿では、これら日中韓で詠まれてきた蚕婦詩の諸相を考察する。

キーワード：蚕婦詩・古文真宝・韓国漢詩・江戸漢詩・釈大俊

一

蚕を飼い、生糸を作るためには、まず、蚕が食べる桑の栽培と収穫から始まり、蚕の成育、絹糸の精製等幾多の工程を経て絹に仕上げられる。そのために莫大な労力が費やされるが、その労働の多くは女手に拠る。その甲斐あって、できあがった絹は光沢もあり、軽く、夏涼しく、冬暖かい、という優れたものである。そうした女性達を詠った一連の漢詩がある。

最近、『春怨秋思―コリア漢詩鑑賞』（瀬尾文子 角川書店 二〇〇三年九月）を読んでいて気づいた、作者不詳、「蚕婦詩」を挙げる。

昨日到城郭 昨日 城郭に到り

●●○○

婦来涙滿襟 婦来 涙襟に滿つ

○○●●

遍身綺羅者 遍身 綺羅の者

●●○○

不是養蚕人 是れ養蚕の人にあらず

●●○○

一読、唐の詩人白楽天の「繚綾」の

繚綾繚綾何所似 繚綾 繚綾 何の似る所ぞ

不似羅絹与紈綺 羅絹と紈綺とに似ず

応似天台上明月前 応に天台上明月の前

四十五尺瀑布泉 四十五尺の瀑布泉に似たるべし

中有文章又奇絶 中に文章有りて又た奇絶

地鋪白煙花簇雪 地白煙を鋪き 花は雪を簇らす

織者何人衣者誰 織る者は何人 衣る者は誰ぞ

越溪寒女漢宮姫 越溪の寒女と漢宮の姫

〔白氏文集〕卷四。本文は那波本による。

を連想させる。このことについては、別稿で論じた。¹⁾「蚕婦詩」は、養蚕を、「繅綾」は織婦を詠んでいるが、製造者と享受者が全く異なることを、第三者の詩人が嘆くという構図は同じである。

「蚕婦詩」を含め、これらの漢詩を韓国比較文学会（二〇〇九年五月九日於高麗大学）で発表した際、世宗大学の李秉鎮教授から、この詩は、韓国のインターネットで「蚕婦」を検索すると李氏朝鮮時代の李孟専（一三九二～一四八〇）の作であるとの教示を得た。韓国比較文学会発表時は、無名氏であるから、稚拙な作など勝手な思いこみから低く評価していたが李孟専はれっきとした政治家であった。初めての韓国比較文学会での発表と質疑応答の成果に、遠くソウルまで来た甲斐があったと感慨一入であった。

『韓国民族文化大百科事典』（一九七三年三月）等によると、李孟専は政治家としては名を残したが、特に詩集が伝わっているわけでもなく、詩人としては無名に近い。ところが、その二箇月後、大手前大学の漢文学の授業で、『古文真宝』に収められた司馬温公の「勸学文」の「養子不教父之過（子を養ひて教えざるは父の過ちなり）」云々の解説を学生に配布するために、『中国古典名言事典』（諸橋轍次 講談社 一九九三年五月）を取り出していると、その次の頁に

遍身 綺羅の者、是れ蚕を養える人にあらず

〔昨日到「城郭」 婦来涙滿「襟」〕

遍身綺羅者 不「是養」蚕人

（五言古風短編 無名氏「蠶婦」）

とあるではないか。慌てて、『古文真宝』を繕くと、卷之一に李紳の「憫農」の詩と並んで収められていた。恐らく、『古文真宝』の詩が何らかの理由で、韓国では、李孟専の作品の中に紛れ込み、それがそのまま現在でも彼の作として語り伝えられているのであろう。有名な『古文真宝』にある作品が現在でも韓国では李孟専の作と伝えられていることには驚きを禁じ得ない。それから旬日を経ずして、徒然に『唐宋詩の鑑賞』（沢口剛雄 福村出版 一九六九年一月）を読んでいると、前掲の「蚕婦」詩が一字の異同も無いまま掲載されており、作者は張俞とあり、作者小伝には、

張俞（一〇三九年頃の人）

郫県（今の四川省の郫県）の人。幾度か進士の試験を受けたが、みな中らなかつた。のち四川省の青城山に隠居して、みずから白雲先生と号した。

とある。

【鑑賞】には、

この詩も重点を転句にしている。「遍身綺羅者」は都会の豪富の女たちである。結句の「不_レ是養蚕人」が、製作するものはその恩恵にあずかれない貧家の女性である。転結の表現が見事である。この詩の起承の二句は、都会に行った人が、帰って来て悲泣した。女性の悲涙は何によるのか、転句で巧みに説明した好詩である。作者張俞は幾度かの進士の試験に落ちた悲運を、進士の第に登った晴やかな生活を見て悲痛した体験がこの同情の詩となったのであろう。この詩に女の悲しみが脈うっているゆえんである。

張俞は結局科擧に及第せず、隠者の生活を送った故か、労働する者への同情は人一倍強かつたようである。張俞の蚕婦詩は『全宋詩』（卷三八二）に見えるが、『古文真宝』の編者、黄建は気づかなかつたのであろうか。

この「蚕婦詩」は張俞の作と認定して良いであろうが、『古文真宝』では、無名氏として収載され、それがどういふわけか、韓国では李孟専の作として、今日に伝わっている。日本で「蚕婦」をインターネットで検索すると、ちゃんと張俞の作として挙がっている。但し、『古文真宝』に入集しているとは書かれていない。

「蚕婦詩」は、唐代、大中（八四七〜八六〇）時代の詩人、司馬扎にも詠まれた。

蚕女

養蚕先養桑 蚕を養ふは桑を養ふを先きとす

蚕老人亦衰 蚕老い人亦た衰ふ

苟無園中葉 苟しくも園中に葉無くんば

安得機上糸 安くんぞ機上の糸を得ん

妾家非豪門 妾が家 豪門に非ず

官賦日相追 官賦 日に相ひ追ひ

鳴梭夜達曉 梭を鳴らし 夜曉に達するも

猶恐不及時 猶ほ恐る 時に及ばざるかと

但憂蚕与桑 但だ憂ふ蚕と桑とを

敢問結髮時 敢へて問ふ 結髮の時

東隣女新嫁 東隣 女新に嫁し

照鏡弄蛾眉 鏡を照らし 蛾眉を弄ぶ

この他、宋の謝枋得（一二二六―一二八九）も、次の詩を残した。

蚕婦吟

子規啼徹四更時 子規啼徹す 四更の時

起視蚕稠怕叶稀 起きて蚕稠を視て、叶ふこと稀なることを怕る

不信楼頭楊柳月 信ぜず楼頭 楊柳の月

玉人歌舞未曾歸 玉人歌舞して 未だ曾て帰らざるを

前掲『唐宋詩の鑑賞』の作者小伝には

字は君直。宋末の愛国詩人のひとり。豊山と号した。弋陽（今の江西省に属す）の人。官吏であったが、南宋亡国の後、福建地方に隠れ住んだ。元朝は彼を威逼して官吏に登用しようとしたが絶食して拒みつけて死んだという。

このほか、『寒泉』で検索すると、唐の来鹄、杜荀鶴に「蚕婦」の例が見える。また、「蚕婦詩」という詩題ではないが、養蚕の苦しみを詠んだ詩に、唐の王建「簇蚕辞」や明高啓「養蚕詞」があり、これらの詩については、韋旭昇『中国古典文学と朝鮮』（豊福健二監修／柴田清継・野崎充彦訳 研文社 一九九九年三月）において已に触れておられる。

このように、中国では蚕婦の労働の辛さ、作者者と着る者の違い、徴税の厳しさを詠む詩は脈々として詠み継がれた。

二、韓国の蚕婦詩

韓国では、高麗晩期の李穡によって詠まれている。

蚕婦

城中蚕婦多 城中 蚕婦多し

桑葉何其肥 桑葉 何ぞ其れ肥えたる

雖云桑葉少 桑葉少なしと云うと雖も

不見桑苦餓 桑の餓えに苦しむを見ず

蚕生桑葉足 蚕の生まるるや桑葉足るも

蚕大桑葉稀 蚕大なれば 桑葉稀なり

流汗走朝夕 汗を流して 朝夕に走るは
非縁身上衣 身上の衣に縁るに非ず

(本文、訓は次の書に拠った。韋旭昇『中国古典文学と朝鮮』豊福健二監修／柴田清繼・野崎充彦訳 研文社 一九九九年三月 一八三頁)

李穡(一三二八―一三九六)は、『春怨秋思―コリア漢詩鑑賞』(瀬尾文子 角川書店 二〇〇三年九月)の解説に、次のようにある。
高麗末葉の首席及第の文官。学者。号は牧隱。本貫は韓山。父、李穀に従い、元に行き、朱子学を研究。元で官職に就いて帰国。翌年も元で登用され一三五六年に帰国。成均館大司成(成均館大学学長)になり、朱子学の発展に貢献。政堂文学(学者の最高位)。一三八九年、李成桂の威化島回軍(反乱軍)により、急速に傾いた高麗王朝を建て直そうと尽力。しかし、易姓革命で李成桂が朝鮮王朝を建国。その後は召されても仕官せず、高麗に節義を貫く。彼の漢文の文風は、李朝二百年をも支配した。『牧隱集』(五十五卷)がある。

この他、李朝末期の趙秀三に

采桑女

蚕到三眠欲成繭 蚕三眠に到りて 繭と成らんと欲す

且待促織鳴我杼 且く促織 我が杼に鳴くを待たん

可憐蚕女空辛苦 憐れむ可し 蚕女空しく辛苦す

官箱匹帛皆出汝 官箱匹帛 皆汝より出づ

(本文、訓は次の書に拠った。韋旭昇『中国古典文学と朝鮮』豊福健二監修／柴田清繼・野崎充彦訳 研文社 一九九九年三月 一八九頁)

等、李氏朝鮮時代の漢詩には、中国と同様、蚕婦の過酷な労働を批判的に詠む詩の系譜が脈々と認められる。このように多く詠まれた蚕婦

詩の系譜もあつて、『古文真宝』の無名氏の「蚕婦詩」(事實は張僉の作)が、韓国では李孟專の作と誤伝されたのであろう。

三

日本では、こうした蚕婦の例は極めて少なく、江戸末明治初期になって漸く、釈大俊(一八四六―一八七八)によって詠まれる。

蚕婦

終身不着綺羅香 終身着けず 綺羅の香

辛苦蚕桑供御裳 辛苦蚕桑 御裳に供す

聞説長安金屋女 聞く説く 長安金屋の女

画眉傅粉侍君主 眉を画き 粉を傅けて君主に侍す

新釈漢文大系『日本漢詩』(猪口篤志著 明治書院 一九七七年一月)の【余説】には、

この詩は宋の寇準の妾蒨桃の「束綾詩」の余意に近い。蒨桃の詩は、一曲清歌一束綾、美人猶自意嫌_レ輕、不知織女寒_レ牕下、幾度拋_レ梭織得成(丹羽注・「得_レ成」であろう。)(君の宴に侍して、ただ一曲の歌を終えるたびに一束の綾を頂戴しながら、歌舞の美人はそれでも猶恩賞の軽いことを思うのである。だが、考えても見よ。一束の綾を織り成すには、織女が寒窓の下で、幾たび凍る手を呵しつつ織りあげたものであるかを)

とあり、宋の寇準の作を類例として挙げている。しかし、詩題も一致しており、「綺羅」の語も内容も共通しており、江戸時代、『唐詩選』とともに、大流行した『古文真宝』の「蚕婦詩」から想を得て作られたと考えるべきであろう。

積大俊は、初山衣洲の『明治詩話』（上巻）に於いて、

好談古今英雄事迹 好みて古今英雄の事迹を談ず

大論時事。悲憤慷慨。語与涙下。大いに時事を論じ。悲憤慷慨。語、涙とともに下る。

浮屠憂国者前有月照。後有大俊。雖其所主不同。亦奇人物也。浮屠ふとにして国を憂ふる者には前に月照つくと有り。後に大俊有り。其の主とする所同じからずと雖も。亦た奇人物なり。

等と評された人物である。僧籍にありながら国を憂え、悲憤慷慨し、義気のある人物であつたらしい。蚕婦の過酷な労働とそれを知らぬかのように贅沢を極める人々の矛盾を詩に詠んでおり、幕末の志士たる面目躍如たるものがある。因みに、『明治詩話』の積大俊の項に、「蚕婦詩」は収録されている。

明治の文明開化の時代になって、養蚕業、製糸業は当時の花形産業になつたようで、それを誇らしげに詠む漢詩も詠まれた。

蚕婦吟

幾日天晴鳥在林 幾日か天晴れて 鳥は林に在り

茜裾楚楚採桑心 茜の裾 楚楚として 桑を採むの心

隣家蚕事妾今羨 隣家の蚕事 妾 今羨む

去歲能収三百金 去歲能く三百金を収めたり

嚶々吟社 明治二十一年刊行『佐久市志』歴史編（四）近代より

『宮中養蚕日記』（田島民 高良留美子 ドメス出版 二〇〇九年七月）は、明治五年、群馬県佐波郡島村の蚕種業者・田島弥平の長女

田島民が、他の蚕婦と共に宮中に滞在して養蚕をしたときの体験を書き記した日記である。それによると、明治初期はまだ、『女工哀史』『あゝ野麦峠』に見られるような悲惨な状況ではなく、最新の欧州の新技术を導入し、産業を興す誇り高い仕事として捉えられていた。このころは未だ、多額の報酬も得ていたようである。

今まで挙げてきた日中韓の「蚕婦詩」の中で、唯一、蚕婦を肯定的に捉えた作品である。時代状況とともに「蚕婦詩」の詠まれ方も変化

するが、明治時代後半になると蚕婦達の労働環境はまた逆戻りしたのではないか。

「蚕婦詩」中国では宋代に、韓国では早くも高麗末期十四世紀に詠まれている。一方、日本では、十九世紀後半になってようやく蚕婦詩は詠まれた。日本に比して韓国の方がより、中国的、儒教的と言えようか。⁽²⁾

注

(1) 「絹を惜しむ詩歌—『万葉集』と『白氏文集』と韓国の漢詩—」(『日本古代文学と白居易』勉誠出版二〇一〇年三月)。白楽天には、この他に

も、「新楽府」の「紅線毯」、「秦中吟」の「重賦」などに類例がある。細かく分けると、桑を取り、繭を養う労苦を詠った「蚕婦詩」の系列と出来上がった絹糸を織る労苦を詠う「織婦詩」の系列がある。更にそれらを仕立てる「縫婦詩」も少しではあるが詠まれている。「紅線毯」、「重賦」は「織婦詩」の系譜に入る。本稿では、主に「蚕婦詩」の系列を論じ、「織婦詩」は別に論じたい。

(2) 韋旭昇『中国古典文学と朝鮮』(豊福健二監修/柴田清継・野崎充彦訳 研文社 一九九九年三月 一九七頁)に、已に同様の指摘がある。

追記一

韓国での着る者と作る者との違いを詠んだ嚆矢は、新羅末崔致遠(八五七?)の「江南女」の

却笑隣舍女 却って笑ふ 隣舍の女

終朝弄機杼 終朝 機杼を弄するを

機杼縦勞身 機杼 縦ひ身を勞すとも

羅衣不到汝 羅衣 汝には到らず

(『三韓詩龜鑑』卷之上)

であろうが、注1で述べたように、これは「織婦詩」の系譜に入る。

唐王粲（咸通三「八六二」年の進士）の江南春賦（『全唐文』卷七七〇）に

誰見其曉色東皋。所々農人之苦。誰か見ん其の曉色の東皋。所々農人の苦しみ。

夕陽南陌。家々蚕婦之愁。夕陽の南陌。家々蚕婦の愁ひを。

とある。王粲の詩は、蚕婦の愁いを詠っている。江南の女性達の製糸の苦勞を詠むという点では、同工異曲である。二人は共に黄巢の乱のころの人であり、崔致遠は唐に渡っており、影響関係が考えられる。恐らく、王粲の作に倣って、崔致遠の「江南女」は詠まれたのであろう。なお、前掲、白楽天の「繅綾」にも「越溪寒女漢宮姫（越溪の寒女と漢宮の姫）」「染作江南春草色（染めて江南春色の色と作す）」と江南の女性達の機織り仕事が詠まれており、白詩からの影響が考えられる。なお、現在も蘇州を中心に江南地方は絹織物は盛んである。

追記二

作る者と着る者の矛盾を嘆いた詩には、他にも明の俞汝舟の妻の詩がある。（一海知義先生ご教示。『漢詩の散歩道』日中出版 一九七四年十月 寛久美子先生担当 一六九頁〜一七一頁）。その詩は、

貧女吟 俞汝舟妻

夜久織未休 夜久しくして 織ること未だ休めず

憂憂鳴寒機 憂憂 寒機鳴る

機中一匹練 機中 一匹の練

終作阿誰衣 終に阿誰の衣と作る

というもの。同書には、「作者とされる俞汝舟の妻は明代の人だが、夫婦ともにくわしいことはわからない。」とある。

ところが、最近になって気づいたことであるが、この詩は、韓国の『韓国歴史代名詩全書』（一九九七年五月 明文堂 五〇〇頁）には、次のようにある。

貧女吟 俞汝舟妻

夜久織未休 夜久しくして 織ること未だ休めず

軋軋鳴寒機 軋軋 寒機鳴る

機中一匹練 機中 一匹の練

終作阿誰衣 終に阿誰の衣と作る

とあり、二句目が軋軋となっているが、同一の詩である。

作者の解説には、「姓は金氏の女性で兪賢良に嫁ぎ、兪汝舟夫人と呼ばれ、詩集一卷が伝わっている。」とあり、『漢詩の散歩道』の作者と同一人物ということになる。清錢謙益『列朝詩集』の末に「朝鮮」の項目があり、その末に「兪汝舟妻」の名前が見える(寛文生氏ご教示)。

更に調べると、李氏朝鮮の最高の女流詩人、許楚姬(一五六三〜一五八九)の詩集『蘭雪軒集』に「貧女吟四首」が掲げてあり、その三首目の詩は、前掲、明の兪女舟妻の作と一字の違いも無い(前掲『三韓詩龜鑑』の崔致遠の「江南女」の詩の「参考」にもこの四首が載っている)。ということは、李氏朝鮮時代の女流詩人のトップに位する蘭雪軒(許楚姬の号)の作と兪汝舟の妻の作のどちらかが誤って伝わったのであろう(兪女舟妻の生没年は調査中)。

日本でも、平安時代の紀長谷雄(八四五〜九一〇)によって「貧女吟」(『本朝文粹』巻二)は詠まれている。しかし、この詩は、富家鍾愛の娘が浪費家の悪い男に嫁いだため、零落したことを詠ったもので、内容はかなり異なる。